

XenosagaI・II - 第十七話 旅立 - Abfahrt - 下

エルザ 

ハマー： いやあ、快適な航海っすねえ。

トニー： 今回はナビがしっかりしてっからなあ。いつもとはエライ違いだぜ。

ハマー： あ、それは挑戦っすね。受けて立つっすよ！

マッシューズ： ああ、うるせえ！ どっちも黙れ！

――嬢ちゃん、次のコラムまではあとどんくらいだ。

モモ： 7時間24分です。

マッシューズ： ふわあ、一眠りする時間くらいはありそうだな。

モモ： あ――――！

U.M.N.に障害発生！ 多数のリクエストで、パルスが不安定になっています！

シオン： まさか――グノーシス！？

モモ： いえ、通常通信帯に集中してますから――多分、人為的な現象です。

ジギー： この反応は――おそらく艦隊規模の交戦状態にあるようだな。

カナン： 旧ミルチアに群がってきた者同士が、醜く争っているわけか。

マッシューズ： トニー、パスできるか？

トニー： できないとは言いたくねえが、難しいな。

いったんゲートアウトして、交戦宙域を突っ切った方が、航路的には安定する。

――安全はなくなるだろうけどな。

カナン： こちらにはE.S.がある。船から先行させて、強行突破すれば問題ない。

Jr.： 相手の正体もわからねえってのに、相変わらず過激だなあ。

カナン： 俺がアシエルの増設シートからナビゲートする。

モモ： ナビゲートなら、モモが――

カナン： あんたはゼブルンを頼む。観測用には劣るが、俺にも最低限の機能は備わっている。

Jr.： おいおい、アシエルのコクピットに余裕はねえぞ。増設シートなんて――

カナン： ウェポンベイに、耐Gシートを備え付けてある。俺なら、そこでかまわん。

Jr.： ――ったく、無茶しやがるぜ。

ジギー： 無茶であろうと、他の方法がなければ、選り好みする余地はあるまい。

KOS-MOS： ――はい、他の選択肢では、本宙域突破の可能性はいずれも4%を割ると推定されます。

マッシューズ： よっしゃ、決まりだな。E.S.に乗る奴は、カーゴブロックへ行ってくれ。

それとヴェクターの兄ちゃん、エルザのナビシートを頼むわ。

モモ： お願いします！

アレン： ぼ、僕がですか？

マッシューズ： 半人力扱いが不満なら、自分で商品価値を証明してみせろや。

アレン： わ、わかりました。僕だってせめて八割力くらい――

トニー： よっしゃ、ゲートアウトするぜ。30 からカウントダウンよろしく！

アレン： はい！

――

マッシューズ『みんな、エルザは後方30000を追尾する。進路の確保、よろしく頼むぜ。』

シオン： 了解！

Jr.： ふう、やけにガードの堅い敵ばかりだな。

ジギー： なぜだ――

あの防御フィールド――百年以上も前に、移民船団が使用していた技術だ。

シオン： 移民船団って――非武装組織じゃないんですか？

ジギー： その通りだ。だが、非武装であるが故に、強固な防備を必要とした。

それが、あのエネルギーフィールドだ。

ケイオス： どうやら、この宙域で戦っている一方は移民船団に間違いないようだね。

シオン： じゃあ、もう一方は――

KOS-MOS： 解析の結果、星団連邦軍である可能性がもっとも高いと思われます。

Jr.： 連邦軍も、移民船団も、ヤツの手の上かよ。

ジギー： ヤツ？

Jr.： ああ、性格のねじくれた、あいつさ――

――

アルベド： くくく――愚者どもめ、互いに殺し合い、滅びてゆくがいい――

――

オペレーター： 司令、第一分艦隊が壊滅しました！

リューリック： なぜだ、こんなところで移民船団と遭遇するなど――こんな馬鹿な偶然――

ジン： 偶然でなければ必然、ということになりますね。

U.M.N.に細工して、この先の通行を困難にした者の正体――議員は心当たりがおありですか？

リューリック： さあ、わかりません。我々は人類社会全体の幸福に寄与するために、

艦隊を派遣しているのです。それを邪魔するなど――

ジン： （ふむ、彼らのたてまえはともかく、すべてが読まれていたことはたしかなようですな

おそらくは旧ミルチアへの道を開いた者――アルベド・ピアソラとやらの仕業ですか）

――それでは、敵の正体については、いかがですか。

リューリック： そちらは明白ですな。分艦隊からの交戦記録で確信しました。

敵は――移民船団です。

ジン： ほう――――

リューリック： 彼らは、ゾハルの力の使い道をよく知っています。

この宙域なら、ミルチアからさほど遠くない。

あふれ出るゾハルの波動を、エネルギーフィールドに転換して、防御場を形成しているのです。

あれなら、ただのA.M.W.S.でも、恐るべき兵器となる。

ジン： なるほど、で――対抗策はおありなのですか？

リューリック： ありますとも。

――U.R.T.V. ポッド隊、発進させてください。

オペレーター： 了解しました。U.R.T.V.-P.、13000番台から順次、離艦急げ！

ジン： あの兵器は、まさか――

リューリック： ほう、気づかれましたか。さすがはミルチア政府からおいでいただいたオブザーバーだ。

そう、あれは十四年前に開発された生体兵器――U.R.T.V.の技術を転用したものですよ。

—

KOS-MOS: ー交戦宙域に変化がありました。

シオン: どうしたの？

KOS-MOS: 連邦軍の本隊から、機動兵器多数が投入されました。移民船団艦隊を駆逐しています。

Jr.: 機動兵器ー兵器だとぉ？

モモ: どうしたんですか、Jr. さん。

Jr.: ちくしょう、なんだかわからねえがー気持ち悪い。なんだ、この感触はー

カナン: ー！ この反応はー

モモ: あーこちらでも捉えました！

シオン: どうしたの？

モモ: 前方に時空震です！

カナン: これはー大質量物体のゲートアウトだな。

ケイオス: こんな場所にゲートアウトだなんてー

ジギー: いかん、対衝撃姿勢をとれ！

—

リューリック: な、なんだ、あの巨大物体は！

オペレーター: 司令、U.R.T.V. ポッド隊、次々と駆逐されていきます！

ジン: どうも、機動兵器に頼りすぎたようですね。

リューリック: くーならば、艦砲射撃で対抗する。
全艦、2000 万キロラインに展開せよ！

オペレーター: 了解、全艦に通達しますー

ジン: ！ いけない、その陣形ではー

オペレーター: こ、これはー

司令! 巨大物体より、高エネルギー波が放射されました！

リューリック: て、転進だ! 全艦転進せよ!

オペレーター: 着弾まで 60 秒!

ジン: ーくっ。

リューリック: なぜだ、なぜ私がー

私がこんなところでえええっ!

—

KOS-MOS: 連邦軍艦隊、87%が消滅しました。

シオン: そんな———

Jr.: たった一撃でかよ——なんなんだ、あの要塞は——

ジギー: どうも、俺の記憶にある物と、同一のようだな——

Jr.: おっさん、知ってるのか!

ジギー: ああ、あの外観には見覚えがある。

そう、あれは百年以上前、俺がジャン・ザウアーと名乗っていた頃の——

移民船団の巨大星間船だ。かつて、俺が住んでいた星系にも訪れた——

シオン: でも、移民船団は非武装集団のはずですよ——教皇は平和主義者だって——

Jr.: U-TIC 機関が移民船団の遺物を濫用してるか、でなければ——

ケイオス: ——Jr.、ちょっといいかな。

Jr.: あ、ああ、なんだよ。

ケイオス: あの機動要塞の中に、いくつかの E.S. を感じる。

そのうちの1機は——多分、シメオンだ。

Jr.: !

アルベド、そんなところにいやがったか——

ケイオス: ——行くんだね。

Jr.: ああ、もちろんだ!

シオン: あの要塞を排除しない限り、これより先のゲートジャンプは不可能だな。

シオン: ゴハルを目指すのなら、彼とはどこかで決着をつけることになるはず——

Jr.: ああ、その通りだぜ! あいつは——俺が止めてやる。

モモ: エルザに、連絡をいれておきます。

ジギー: そうだな、排除が終わるまで、退避していてもらうべきだろう。

シオン: (Jr. くん——

忘れないで——決着は、倒す以外にもあるかもしれないってこと——)

機動要塞

Jr.： ちいっ！

？？？： はああああああっ！

Jr.： な、な、なんだ！

ケイオス： 大丈夫、味方だよ。

Jr.： 味方あ？ いま、生身の人間が A.M.W.S. をぶった斬ったように見えたぞ！

ケイオス： ー久しぶりにその技を拝見しました、ジン・ウヅキ大尉。

カナン： ジン・ウヅキだと？

シオン： え、兄さんー！？

ジン： いや、お恥ずかしい。以前ほどの切れ味はなかったでしょう。

ケイオス： いえ、そんなことはありません。大尉だって、すぐにわかりましたよ。

Jr.： （シオン、この人ー昔から、こんなすげえことできたのかー）

シオン： （わ、私も知らなかったー）

ケイオスくんは、なんで兄さんの技を知ってるの？

ケイオス： ミルチア紛争の時に、ちょっとねー

シオン： （カナンさんや Jr. くんだけでなく、兄さんとも十四年前からー）

ジン： ケイオスくん、よろしいのですか？

ケイオス： ええーもうすぐ、僕たちは旧ミルチアを訪れることになります。

もう、十四年前のことを隠す必要はなくなるでしょう。

ジン： ーわかりました。

シオン： （じゃあ、ケイオスくんもあの時ー）

ーそれと兄さん、なんでこんなところにいるのよ？

ジン： いや、それがですねー

ジギー： むーそれでは、轟沈する艦から、単身で脱出したということかー

ジン： ええ、お恥ずかしいことです。もう少しだけ有余があれば、一人でも二人でも、

救えていたかもしれません。いや、時間のせいではなく、私の未熟のせいですねー

ケイオス： いや、ご自身を救えただけでも、さすがだと思いますよ。

ジン： ありがとう、ケイオスくん。

Jr.： なあ、さっきの話にあったー

ジン：―――ええ。

Jr.：U.R.T.V. ポッドって奴のこと、もっと教えてくれないか、詳しく――

ジン：―――私も実物を見たわけではありませんが、小型機動兵器のようでしたね。

無人機ではありますが――その中枢制御ユニットには、生体部品が使われていたようです。

モモ：生体部品って――

シオン：まさか――

Jr.：畜生っ！ 奴ら、ミルチア紛争の後も、U.R.T.V. の研究を続けてたのかっ。

ケイオス：どうも――そのようだね。

ジギー：どういうことだ？

Jr.：生体部品ってのは、脳だよ！ 奴ら、生きたU.R.T.V. の脳みそを機動兵器に組み込みやがったんだ。

モモ：ひどい――

ジン：移民船団の兵器は、ゾハルの波動を利用したエネルギーフィールドを持っていました。

その波動とのリンクを断つために、U.R.T.V. の力が有効だったのでしょう――。

Jr.：くそっ、そんなことのために――

モモ：Jr. さん――――

Jr.：――――――

――わかってる。

胸糞悪い兵器を作りだした奴とも、いずれ決着はつける。けど――――

いまの俺は、この要塞の奥にひっ籠もってる奴のところへ、行かなきゃならねーんだ。

ケイオス：そうだね。行こう、Jr.。きっとこのすぐ奥だよ。

Jr.：ああ――――

Jr.：なんだ、この装置――

ジン：どうやらこれを操作しないと先に進めない仕掛けのようですね――

どうやら先に進めるようになったみたいですね――先を急ぎましょう。

—

ケイオス：感じる、この奥に E.S. がいる。多分、3 機——

シオン：シメオンの他に 2 機も！

Jr.：面白え、ちょうど 3 対 3 ってわけだ。

モモ：Jr. さん——

Jr.：心配するな、モモ。たとえ奴がいても、もう指一本触れさせねえ。

それが——サクラとじゃなく、俺自身との誓いだからな。

モモ：はい——信じてます。

シオン：行きましょう。

Jr.：ああ！

アルベド：くくく——U-TIC 機関も冗談がきついで。

こんな稚児どもに、アニマの器を預けるとはな。

リヒャルト：へえ、ミュータントにしちゃ、立派な口がきけるじゃないか。

まあいいや——そうでなくちゃ、悲鳴を聞く愉しみがないからねえ。

僕はリヒャルト、我が名、覚えておくがいい。

アルベド：覚える？ 貴様ら、俺の記憶に留まる価値が自分にあるつもりなのか？

ヘルマン：——リヒャルトさま、この男、危険です。戦闘は私が——

リヒャルト：うるさいぞ、ヘルマン。——こいつを壊すのは僕だ。

なあ、そうだろう。綺麗な壊れっぷりを僕に見せておくれ！

ヘルマン：こちらも——

アルベド：ふん——望み通り、覚えていてやろう。

貴様らの生が途絶える瞬間を——断末魔をな——！

リヒャルト：うわああああああっ！

ヘルマン：リ、リヒャルトさま——

アルベド：くくく、アニマの器の力で逃れたか。そんなことじゃあ、俺の中に己を刻み込むのは無理だな。

——さあ、端役はもう退場したぜ。次はお前たちが舞台に上がる番だ！

Jr.：くっ、気づいてたのかよ！

アルベド：ほう、ルベド——出がらしになったペシェをまだ連れ歩いてるのか。

モモ：―――！

アルベド：どうしたんだ、ルベド。もうこのレアリエンの内には、Y資料はない。

そして、お前が大好きだった、ミズラヒの娘もないんだぜ。

いまさら、お前が執着する価値など、どこにもないだろう。俺だって、もう用はないしなあ。

ひゃっはっはっは―――

モモ：―――

Jr.：モモ、あんな奴の言うこと、気にする必要はねえぞ。

ジギー：その通りだ。お前の価値は、我々が知っている。

モモ：Jr.さん、ジギー――

Jr.：だいたい、利用価値が消え失せたのは、てめえの方じゃねえのか。

U-TIC機関の連中とも、内輪もめしてたみたいじゃねえか。

いや、そんなことより、ここでなにやってやがる。まさか、俺を待っていた――

なんて、嬉しいこと言うつもりじゃねえだろうな。

アルベド：俺も残念だが、そうは言ってやれないなあ、ルベド。

これでもゾハルへ至る道を急ぐ身なんでなあ。

敬虔な巡礼のように、脇目を振りつつ廻っていくわけにはいかないのさ。

ジン：この振動は――まるで、ジェネレーターが稼動しているような――

Jr.：アルベド、てめえ！ なにたくらんでやがる！

アルベド：さあね。知りたければ、生き残ることだ。じゃあな、俺あもう行くぜ。

Jr.：待ちやがれ！

???：どこへ行くんだい？

リハルト：こんなところで会えるとは、嬉しいなあ――

シオン：その声――！

リハルト：我が名、リハルト――もう覚えてくれたね。

ヘルマン：リハルトさま、あのアルベドという男の目的、ジェネレーターを暴走させ、

我々を一網打尽にすることかもしれません。お急ぎください。

リハルト：ふん、こんな雑魚どもにそんな時間は必要ないね。

ケイオス：―――

リハルト：さあ、行くよ！

【 E.S. 戦 VS スキュータム、パイラム 】

リヒャルト： そんな――E.S. が負けるはずは――

ケイオス： ――君たちは、哀れだね。

ヘルマン： なにが言いたい。

ケイオス： E.S. なんてものに、なんの意味もない。

アニマの器は――人を不幸にするものだ。僕は――

そんな人たちを、たくさん見てきた。

ヘルマン： 君はまさか――！

――く、脱出する！ リヒャルトさま、お急ぎください！

リヒャルト： ヘルマン、戯言に耳を貸すな！ アニマの器だけは回収する。これがあれば、僕らは――

ジン： ――どうやら、逃がしてしまったようですね。

Jr.： くそ、邪魔しやがって――アルベドはどこに！

KOS-MOS： シオン、勧告します。この要塞から脱出してください。

中枢部のエネルギー反応が増大しています。

ジギー： く、自爆するつもりか――

Jr.： あの野郎、また同じ手を――

シオン： 脱出しましょう、Jr. くん。きっと旧ミルチアで追いつけるわ！

Jr.： く――それしかないか。

――

KOS-MOS： シオン、エネルギー反応、ジェネレーター限界を超えたと思われます。

シオン： そんな――

ジン： みんな、E.S. 同士の手をつながせて！

モモ： ！ この反応は――

シオンさん、彼がやろうとしていることは――！

シオン： ！ これは――――